

を支えることです。社会資源を活用しながら、利用者の皆さんが抱く想いの実現に向けて様々な角度から検討を重ね伴走する。小さな取り組みの積み重ねが、いずれ大きな成果となって表れると信じ、職員一同、歩みを進めてまいります。

今年は【晴】という一文字を選びました。沈みがちな今だからこそ、気持ちだけでも晴れやかに！

《頑張れ》とは《顔、晴れ》…今をしっかりと過ごし皆さんの顔に晴れ晴れとした笑顔が戻りますように。今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

港育成園 管理者 松本 源太郎



港育成園管理者を引き続き拝命いたしました。

私が選ぶ今年の一文字として「波」を選びました。

「波」の皆さんのイメージはどうでしょうか？

「波」に寄せるイメージは「波乱」でしょうか？「波風が立つ」といった言葉もあります。

また、渚のことを「波打ち際」と言ったりします。そうすると、穏やかな波を想像します。



この二つから、今年の一文字を考えてみたいと思います。

まずは「波乱」についてですが、今年の港育成園は正職員の異動がいつも以上にあったり、年度をまたいで新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響もあったりと、まさに「波」が立つ状況ではあります。

しかし、これまでも、港育成園はいろんな「波」を経験し、「波乱万丈」であっただろうと思います。

ですから、私自身としてはこの「波」をピンチではなく、チャンスととらえることで、施設としてこの「波」を越えて、逆に今度は「波」に乗れたらいいのではないかと。

次は「波打ち際」について港育成園のあり方をなぞらせてみましょう。

昨年度は個別活動に地域のボランティアさんにレギュラーで入ってもらったり、見学も兼ねて地域福祉コーディネーターの方々への啓発活動を行ったりしましたが、今年度も地域との関わりをさらに意識できるように活動を継続していきます。

ひいては地域の障がい者福祉を向上させるために、障がい福祉に興味を持ってもらえるよう地域の方やこれらを担う次世代へのアプローチをしていければと考えて

います。

それはまさに波打ち際のように、波が出たり入ったりと開かれた港育成園をイメージします。

そうあれたらいいなど…

これが今年の一文字「波」に込める思いです。

ちなみにですが、港育成園は港区の「波除」(なみよけ)というところにあります。

港第二育成園 管理者 杉原 浩司



4月から港第二育成園管理者兼サービス管理責任者になりました杉原です。

私の今年度の漢字は「知」です。

私は大学卒業後、支援学校の小学部で3年働きました。

そこで初めて障がいのある方と出会い、彼らの人生に寄り添いたいと思い、育成会に就職しました。

育成会では最初、港育成園に配属されました。



そこで障がいも重くても社会の一員として働くことの大切さ、意思の疎通が難しい方のニーズに気付くことの大切さを学びました。

次は西部就業・生活支援センターに配属されました。そこでは一般企業で働くことの苦しさとそれでも誇りを持って働く喜び、そして地域で暮らす人たちの生活を支えるということを学びました。

次はワークスいけじまに配属されました。そこでは年齢を重ねても働く喜びと居場所があるということの大切さを学びました。

次はビーンズに配属されました。そこでは障がいも重くても地域で暮らす喜びと、それを支える人の深い想いを学びました。

次は福島育成園に配属されました。そこでは入所施設の厳しい現実と、それでも楽しく暮らす大切さ、命や人としての尊厳を学びました。

そして3年前に再び、ワークスいけじまに配属されました。以前に比べて高齢化が進んだいけじまでは、親亡き後の生活と向き合いました。保護者がいなくなっても、地域の社会資源とネットワークを作り、必要な支援を繋ぎ合わせれば、住み慣れた場所で自分らしい暮らしが続けていけるということを学びました。